

氏 名（本籍）	かわのよしゆきの 河野 禎之（大分県）			
学位の種類	博 士（障害科学）			
学位記番号	博 甲 第 6336 号			
学位授与年月日	平成 24 年 10 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	介護施設における認知症高齢者の転倒・転落に関する分析的研究			
主 査	筑波大学准教授	博士（学術）	山 中 克 夫	
副 査	筑波大学教授	博士（教育学）	安 藤 隆 男	
副 査	筑波大学教授	教育学博士	柿 澤 敏 文	
副 査	筑波大学教授	博士（医学）	高 橋 正 雄	

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

我が国の高齢化に伴う重大な問題の一つに、高齢者における転倒・転落（以下、転倒）の問題があげられる。特に、認知症高齢者の多い介護病棟では医療事故の 8 割が転倒であったとも報告されていることから、入所高齢者の多くを占める認知症高齢者の転倒予防は喫緊の課題となっている。しかし、我が国では施設における転倒について詳細に調査した研究が少なく、入所高齢者、特に認知症の入所高齢者の転倒に関する基礎的知見は十分に得られていない状況にある。

本研究では、近年の転倒研究の系統的な文献的検討からこれまでの知見を整理し、その結果をもとに実際の介護施設において調査、分析を行うことによって、我が国の入所高齢者、特にその多くを占める認知症高齢者の転倒予防について具体的な示唆を得ることを目的とした。

（研究の方法と結果）

第 1 研究では、2002 年～2012 年に報告された高齢者、認知症高齢者および我が国の施設入所高齢者の転倒に関連するリスクファクターおよび転倒予防に関する文献について系統的なレビューを行った。特に転倒のリスクファクターとしては、転倒の既往や移乗・歩行の困難、筋力・バランス機能の低下、薬剤が挙げられている文献が多く、認知症は独立したリスクファクターであることが示されているものの、認知症の中核症状である認知機能障害や周辺症状とされる行動・心理症状（BPSD）に関する分析、事故状況の分析がほとんど行われていないことが明らかにされた。

第 2 研究では、第 1 研究からの示唆を踏まえ、短期間（3 か月）の予備的調査研究を介護施設において実施した。その結果、転倒の多くは、早朝・深夜の時間帯、トイレ・居室などの周囲の注意が届きにくい状況で発生していたことに加え、ふらつき等の身体機能低下や認知機能障害（記憶障害や構成障害等）などの背景要因が転倒の危険性をさらに高めていることが明らかにされた。

第 3 研究では、第 2 研究からの示唆を踏まえ、後ろ向きデザイン（過去 1 年間）を用いて異なる種別からなる多施設において調査を行い、①転倒の発生場所は居室（個室）、食堂・ホールが有意に多いこと、②転倒のタイプは「立位/歩行」、「ベッド」の転倒が有意に多いこと、③転倒の時間は早朝と夜間が有意に多い

こと、④早朝では居室での起床や朝食のためのベッドからの移乗の際、夜間では夕食や就寝準備の際、深夜では居室での排泄に伴う行動による転倒の危険性が高いことが明らかにされた。

第4研究では、信頼性の高い情報が得られる前向きデザインを採用し、事故状況に関して6か月の追跡調査研究を行い、第3研究と概ね一致した結果が得られた。

第5研究では、転倒状況と認知症の重症度との関連について検討し、ごく軽度の認知症では深夜、軽度の認知症では午前の屋外や浴室等のその他の場所、中等度では午後の食堂・ホール、重度ではベッド周辺で、それぞれ転倒がより多く発生しており、重症度ごとに転倒の特徴が異なることが明らかにされた。

第6研究では、対象者の背景要因と転倒との関連を明らかにすることを目的とし、追跡期間中の転倒の有無を従属変数とした多変量解析を実施した。その結果、過去1年間の転倒の既往を有すること、男性であること、BPSDがより重度であることがリスクファクターとして示された。

(総合考察)

本研究の結果、介護施設内の高齢者の転倒は、施設での1日の生活の流れに沿って発生状況の特徴が変化し、また認知症の重症度によっても特徴は異なることが示唆された。具体的には、早朝では1日の中でも転倒が多く、特に重度認知症のような顕著な身体機能の低下がみられる入所者の居室での起床に伴う転倒に注意が必要があること、午前では屋外や浴室等の場所における転倒が多く、軽度認知症のような認知機能に明らかな低下が認められる一方、活動性は十分に保たれている入所者の活動範囲の広がりには注意を要すること、午後における食堂・ホールでの転倒は1日の中でも特に注意を払う必要があり、中等度認知症のように、身体的な活動性自体は保たれているものの、顕著な認知機能障害やADLの低下のために様々な場面で困難を示す入所者の活動中の見守りを優先する必要があること、夜間ではどの認知症の重症度の入所者にも居室における就寝準備に伴う行動には目を配る必要があることが示唆された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

世界的に進む高齢化現象により、高齢者事故、とりわけ転倒事故のリスクマネジメントは、先進諸国共通の高齢者ケアの課題となっている。高齢者の転倒のリスクファクターに関する研究は膨大に存在する。しかし、介護施設に焦点を当てたもの、さらに認知症高齢者に焦点を当て、詳しく検討した研究は少ない。本研究はこの点に着目したものであり、まず評価に値する。また、これまでのところ、具体的なガイドラインとして参考となる知見が得られた研究は決して多いとは言えない。その理由として、ほとんどの研究が、リスクファクターとして、個人特性（転倒の既往など）のみに着目し、転倒事故の発生状況を詳しく調べていないことが原因と考えられる。これに対し、本研究は、まず転倒事故がどのような状況で発生しているのかを分析し、その上で個人特性の関連性について検証している。このことが、総合考察において、リスクマネジメントのより具体的な手立ての提言につながった理由と考えられる。また、個人特性に関しても、認知症の中核症状や周辺症状について詳細に分析されている点は、今までの研究にみられなかった点である。以上のことから、本論文は、オリジナリティーを多く含み、より具体的なリスクマネジメントの視点に立脚した博士の学位にふさわしい論文であると評価できる。

平成24年9月13日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（障害科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。